時評　　東　欧　情　勢

昨年の東欧の目を見張るばかりの動きは、既製の世界観をも揺り動かすようでもあります。

最近テレビで討論番組が流行っています。かって「１億総評論家時代」と言われていましたが、それがまだ続いているようで、訳の分からぬ議論が闘わされているようです。皆が政治に関心を持つことは大変よいことで、自分の世界観から話していくことなのだろうけれど、どうも気になるのは自分と政治の間に距離をおいて、評論家風に発言しているのが目立つことと、生半可な知識をひけらかして、そこから論を起こしていることです。しかもそれが学者と呼ばれる人にも及んでいるのです。

それが東欧情勢についての「今日の東欧の民主化はマルクスの描いた共産主義の崩壊を示している」という政治学者の発言にも現れています。

一体この人はマルクスを読んだことがあるのだろうかというような論考です。

一つ目の批判としては、マルクスはそもそも共産主義のイメージを描くことに禁欲的であったということです。

そして僅かに描いたイメージ（『ゴーター綱領批判』など・・・）と東欧の体制にどのような共通点があるのでしょうか。

その二、そもそもマルクスはロシアや東欧で革命が起こるということを予想しえませんでした。マルクスが考えていたのは「先進」資本主義における革命でした。

その三、しかもそれは世界革命という形でしかなしえない、としています。ちょうど、高度に発達した資本主義下で超絶したコミューンをつくろうという運動は必ず挫折する、ということと同じです。

その四、東欧の体制は共産主義といえるものではありません。共産主義という場合は分業の止揚ということがメルクマールになるのではないでしょうか。そのことを孕みえない、しかも官僚的支配構造があるという意味では社会主義とも言いえないのではないでしょうか。

東欧の情勢、又ソ連で進んでいるペロストロイカの進行は一国社会主義の建設を掲げ官僚主義的な社会体制を築いたスターリニズムの崩壊として示しえるのではないかと思います。

そのスターリニズムの崩壊をマルクス主義の崩壊ととらえるところから、先の曲解が生じているのではないかと思います。その辺は逆に現実に体制として作りあげたものとして現れたのがスターリニズムでしかないところで、そのような曲解が生じたとも言えるのですが、マルクスの思想は現在社会の矛盾に根源的に拮抗することとしてあるので、社会の根源的総体的転覆抜きには実現しません。そのようなこととして生き生きとした進行形の

思想として現在からとらえ返していくことではと思うのです。思想というのは確固としてあるものではなく、過去の思想をとらえ返しつつ作り上げることではないかと思うのです。そのような視点抜きに、しかもその言っていること自体を理解できないで評論するのは、救いようもないことなのではないでしょうか。

今日、東欧はスターリニズムへの反発から、民主化ということにとどまらず、競争原理の導入や資本主義に学べのスローガンまで現れています。そのことを「先進」資本主義諸国は両手をあげて賛同し、援助ということで自らの市場として組み込まんとしています。そこで生み出されるのは新たな「南北問題」でしかありません。　　そういう中で、東欧の社会主義性を追及する苦闘は続くと思います。我々はそのことを客観主義的に論じることなく、世界規模での根源的総体的変革へいかに連帯していくのかということも孕んで、自らの居るところで運動を進めねばなりません。

そういうこととして東欧情勢をみつめ、自らの運動にも教訓化していく必要があるのではないでしょうか。

（時子）